

日本の「戦後」を考える

靖国神社は、近代日本が戦争を遂行する上で、一貫して存在した精神的支柱であった。まさに戦争遂行の精神的拠点であったと言えるだろう。しかし戦後六十年以上を経た現在、靖国神社は、あたかも死者の「慰霊」「追悼」の場であるかのように、すなわち安らかな眠りと平和を祈る場であるかのようにして、私たちの眼前に現れ、内外に議論を呼び起こすものとなっている。このかまびすしい議論の中、性急な処方箋を争うことではなく、それぞれの専門領域から、日本の「戦後」のあり方を考える時間を持ちたい、靖国に向き合いながら、日本の「戦後」を焦点化し、問題化できるパネルセッションを目指したい、とこの企画を立ち上げた。報告は、福島栄寿、高橋秀寿、樋口浩造の三名。

樋口 浩造

靖国問題について、日本を専門領域とするものとしてどう考えるべきかを問いただすと同時に、これらの問題群を日本固有の問題、特殊日本の問題としてではなく、グローバルな状況の中での問題系に置き直す必要性を感じ、ドイツ近現代史の専門家である、高橋さんにご助力いただいた。また、司会は最近占領下の靖国について研究を進めている長志珠絵さんにご協力いただいた。以下、報告順に要旨を述べ、簡単なまとめを付しておきたい。

まず、樋口は「靖国問題」が問いかけるもの——ナショナリズムを超えて」と題して報告をおこなった。前半では、小泉首相の靖国参拝についての文言と、高橋哲哉の『靖国問題』、特に「感情の錬金術」をめぐる議論についての批

判的な考察の中で、ナシヨナリズムに絡め取られない「靖国」議論の方向を模索した。サイードの『文化と帝国主義』を援用しながら、ナシヨナリズムの受容がいかに非現実的な欲望であるかを、簡単ではあるが示唆しようとした。そして後半では、日本の「健全な」ナシヨナリストの典型例として丸山真男の戦後早い時期の発言を取り上げた。著名な「超国家主義の論理と心理」が、一般兵士のアジアへの「抑圧の移譲」を説明してみせる一方で、天皇の戦争責任についての関心が低いことを指摘しようとした。また、そうした状況の中で、戦後も天皇の靖国参拝は継続されていたこと、一九七八年にA級戦犯が靖国に合祀された後、天皇の靖国参拝は今日まで控えられていること、つまり政府による靖国参拝は、違憲・合憲のレベルで議論されているが、一方では、天皇の戦後プランをも狂わせるものであることを、戦後日本が初発から抱え込んできた天皇制温存等の問題の顕在化として考えようとした。「戦後」がまさに終わろうとし、新たな状況が生まれようとしていることを、「靖国」をめぐる議論の中で「戦後」の再審として考察しようとした。

次に福島が、「真宗大谷派の戦中と戦後——戦責告白と靖国と信仰運動」と題して報告した。日本の戦後思想史の特徴について、伝統仏教教団、具体的には真宗大谷派

(以下、「大谷派」)の戦中・戦後を事例として取上げながら考察した。戦中・戦後、多くの門徒に支えられている大谷派教団は、それぞれの時代を生き抜いてきた門徒(僧侶)の思いや感情と密接に関わって存在している。そうした門徒(僧侶)との相互関係を営みながら、教団は存在してきたといえる。そして、戦中・戦後日本を生きだした門徒(僧侶)はまた、同時に戦後日本を生きた市民たちでもある。伝統教団に着目するゆえんである。

果たして、戦中を経験した大谷派は、戦後にどのような歩みを辿り、戦責告白(一九八七年)をするに至るのか。一億総懺悔よろしく、教団内において戦争責任を問う声は皆無に等しかった敗戦直後期から戦責告白の表明に至る経緯、また、その動きと大谷派を取り囲む戦後日本の思潮の有り様と関係はないのか。具体的には、大谷派の戦争をめぐる戦中と戦後の対応について、①戦争への認識(戦責告白)、②靖国問題、③戦死者をめぐる儀礼のあり方、に焦点を合せた。そして、大谷派の戦後を考える上で外せないのは、安保闘争という市民の政治意識が高まる時代でもあった一九六二年に教団が開始した「真宗同朋会運動」(以下、「運動」との関係である。この信仰運動との関係を、あわせて意識しつつ考察を試みた。結論的に言えば、戦責告白、靖国問題、戦死者儀礼をめぐる、一九八〇年代に、大き

く転回があった。戦責告白と併せて、一九八七年に戦死者儀礼のあり方が変更された。こうした動きの前提として、運動の中で行われた、法主制から議会民主制を目指した新憲法の制定（一九八一年）があった。これは、内なる天皇制を課題とする営みであった。また、靖国問題について言えば、一九六〇年代後半より、靖国国家護持法案をめぐる真宗教団は、反対の姿勢をとった。大谷派では、それは、信仰問題として認識され、一九八〇年代に入ると、裁判訴訟が起されるようになる。戦前の大谷派教団は、教義を枉げて国家の戦争遂行に率先して協力する体制を整えていったのだが、八〇年代以後、教団は、その宗教性に基つき国家のあり方を問うという方向へ歩み出す。

一九九五年、大谷派は「不戦決議」を採択した。さらに二〇〇〇年からは、全戦没者追弔法会が開催される時期にあわせて「非戦・平和展」を開催している。二〇〇五年春には、戦争に関わった近代教団史をバネルで辿った。門徒の中には、「自虐的」という表現を用いて、展示内容への中には、「拒否的感情をアンケートに記した門徒もいた。さらに率直な拒否感情をアンケートに記した門徒もいた。さらに言えば、運動の二本柱は、部落問題と靖国問題だが、教化の現場では拒否的な感情も強まっている。バックラッシュという時代思潮と無関係とは思えない門徒の感情や思いが、露になりつつある。戦後民主主義の高まりとパラレルに、

教団の民主化運動があったと類推できるとすれば、昨今の戦後民主主義の退潮もまた、門徒（僧侶）の意識の有り様と無関係ではない。戦中の時代には戦争に乘じ、戦後の民主主義の時代には、そのムードに乗じたとするならば、本質的に教団の態度は戦中も戦後も変わっていないことになる。時代の潮目が変わりつつある現今に、教団もまた立たされている、と問題提起があった。

三人目に高橋が「ドイツ現代史から見た「靖国問題」」と題して報告した。高橋はこれまで、ドイツ現代史をフィールドにし、いわゆる「過去の克服」の問題とその変遷を追い、とくにモニュメント・記念碑の歴史的変遷を記号論的に分析してきた。その際に、ドイツ人はいかに過去を反省しているのかといった道徳的な観点ではなく、戦後ドイツにおける「国民形成」の視点からこの問題を考察してきたが、このような方法論と問題提起を靖国神社や広島平和公園など、戦後日本にとって重要なモニュメントに応用することによって今日の「靖国問題」にアプローチし、この問題も戦後日本における「国民形成」の問題として考えていくべきであることを提案しようとした。

まず、ドイツの戦没者記念碑の歴史的展開を追うことによって、その形態におけるナシヨナリストの戦術を検討し、その戦術が適用されるなかで、(西)ドイツにおける国民

形成の変遷を概観する。つまり、戦後すぐ、西ドイツでは自らをユダヤ人と同様にナチズムの犠牲者とする「犠牲者共同体」に基づく国民形成が行われたが、それに対抗して、ホロコーストを「ネガティブな建国神話」とする理念に基づいた国民の形成も試みられた。「過去の克服」問題はこの両者の国民形成をめぐる展開されたのである。

次に、戦後日本における記念碑の変遷を考察することによって、戦後日本の国民は「犠牲者共同体」として形成され、その際に重要な役割を果たしたのは、「靖国」ではなく、「ヒロシマ」であったことを指摘した。ここでは、二度と戦争を起すまいとする「ネガティブな建国神話」と、平和で豊かな日本を再建できたという「サクセス・ストーリー」に基づいて、「戦争」の犠牲者であり、その死者を礎にして復興を実現していった未来志向の国民が表象されている。この国民は、その戦争の加害性を問題とすることなく、普遍的理念を「大東亜共栄圏」から「平和国家」へと難なく転換させることに成功した。その意味で「靖国」は戦後、国民形成の中心的な戦没者慰霊の場とはなりえなかったが、現在の「靖国」問題、正確には新しい戦没者慰霊施設の建設も含めた現在の「慰霊」の問題は、「ヒロシマ」とそこに基づいた国民共同体の終焉に伴って生じていることが指摘された。

以上の報告を承けて質疑が行われたが、時間がおとしており、十分な時間を確保することは困難であった。質問や意見は主に二人から、樋口に対して事実関係や丸山真男理解について寄せられた。会場は、ほぼ一杯であり、それなりに関心を持ってもらえたのではと手前勝手に推測しているが、期待した若手の反応は、実際には分からない。フロアーの反応については、二点記しておきたい。ひとつは、ゲストスピーカーであり、非学会員であるドイツ現代史が専門の高橋さんに対して、ほぼヤジに近い形で、(丸山真男について)「知らないのなら黙っている」と言う趣旨の発言があったことである。自由な議論を前提にした学会の場の発言だけに、日本思想史学会の現状を再認識させられた思いである。またそれ以上に、四人でテーマを決めそれに合わせて準備を進めてきた私達の問題提起に対して、たとえそれが拙いものであろうとも、なんの反応もフロアーから出されなかったことは大変遺憾であった。日本の戦後史における「靖国」とは何かをめぐる問題提起に対して示された無反応は、応答関係を築き得ない学会の現状を端的に示すものであろう。

付記 要旨の福島・高橋報告はご両人が寄稿された文章に樋口が調整を行ったものだが、最終的な文責は樋口にある。

(愛知県立大学教授)